

統合医療で がんに克つ



特別インタビュー

シリーズ

医療の現場から
吉村眼科内科医院

吉村尚美副院長に訊く

がんになった理由の「気づき」が根本的治療につながる

― 疾病の全方位的治療を目指し、カテゴリーに囚われない治療を実践

ハートクリニック練馬春日町 岡英孝院長に訊く

私のがん治療

― 心臓とこころの2つを診る

高濃度ビタミンC点滴で副作用のないがん治療

特集 がん治療と漢方薬

漢方は、叩かれ損なわれた「患者さんを補う治療」である
塚本善峰 あいあいクリニック院長

有効成分の作用機序が明らかになりつつある漢方薬
― 日増しに拡大していく、がんの緩和療法における漢方の役割
西山寿子 大手町さくらクリニック in 豊洲院長

当院における漢方診療― 医師と漢方の薬剤師による有効な抗がん処方
高橋正樹 つるかめクリニック院長
中尾典義 榎屋相談薬舗株式会社 薬剤師

がん化学療法の副作用を軽減するために、漢方薬を組み合わせることで対応が可能に
今津嘉宏 芝大門いまづクリニック院長

がん治療と漢方薬

当院における漢方診療

— 医師と漢方の薬剤師による有効な抗がん処方

高橋正樹 つるかめクリニック院長

中尾典義 榎屋相談薬舗株式会社薬剤師

調整が期待できます。

はじめに
つるかめクリニックでは、がん患者さんに対して主に琉球温熱療法を中心を高濃度ビタミンC点滴療法、漢方などを組み合わせています。

琉球温熱療法とは、体を芯から温めることにより、免疫機能を活性化し、人が本来持つ自然治癒力を高めていく自然療法です。継続することにより血流改善によるデトックス、自律神経の調節、免疫力の強化、ホルモンバランスの

調整が期待できます。また身体を温めることにより、低体温の方でも体温が上昇し、免疫力の向上、基礎代謝の向上、新陳代謝の活性化が見込まれます。

この長所をさらに引き出し、効果を持続的にするために、身体を継続的に温め、代謝や自然治癒力、免疫力を高めるがんの漢方処方を併用すると、さらなる効果が期待できます。しかしながら経験上、従来の保険診療範囲内の漢方薬では、私や患者さんが期待するほどの結果が出にくいのです。そこで、何か良い漢方処方はないかと悩んでいたところに、福岡

県の漢方薬舗・榎屋相談薬舗株式会社代表取締役で薬剤師でもある

中尾典義さんに出会い、その簡潔で明快、かつ有効な抗がん処方を教えていただき、琉球温熱療法、高濃度ビタミンC点滴療法に次ぐ第3の治療法として診療に加えることになりました。中尾さんの漢方薬局と共同で診療を行っているわけですが、本稿は、その中尾さんと私との共著で、医師と薬剤師による漢方診療について述べさせていただきます。

抗がん漢方の処方についての考え方

中尾典義

私の漢方薬舗にお見えになり、がんの漢方薬をご相談される患者さんは、再発を繰り返し、侵襲的な治療法である抗がん剤、手術、放射線、その他の治療法で十分な効果が見られず、闘病日数も経っており、食欲不振、食慾も落ち、体力を消耗し、余命宣告をされた方が大半です。その際に、薬剤師として何が期



中尾典義氏



高橋正樹氏

待されるかというときに、通常の

漢方薬では効き目がないというこ

とが経験的にわかっていました。

末期がんになるまでには、上記の

侵襲的療法により患者さんはかな

りのダメージを受けています。既

往歴、血液検査結果などを拝見さ

せていただくと、アルブミン、総

タンパク、肝臓の数値、コリンエ

ステラーゼなどの肝臓の栄養の数

値が低下し、炎症の数値が高いに

も関わらず、白血球の数値が上

らなかつたり、貧血や血液濃度の

薄さが見えたりします。

しかしながら、病院の治療方針

に従わざるを得ない状況のなか

といけません。

また、患者さんにとって余命も

あまりないと宣告されていきます

し、患者さんの証しょうによる体質や免

疫力の向上をじっくり見てゆく余

裕もないのです。

機能性を持つ食品由来の“抽出エキス”の有用性に期待

医薬品には用量反応 (DOSE-

RESPONSE) と言います。医薬品の用量

血中濃度および臨床での反応 (有

効性および副作用) を踏まえて、

適切に使うことが求められます。

個々の患者さんに対して医薬品を

安全かつ有効に使用するために適

切な開始用量、病状の必要性に合

わせて用量を調整し、増量した結

果の有益性が期待できないか、あ

るいは増量すると忍容できない副

作用が発現するかなどが検討され

ます。

経験上、このような抗がん漢方

処方に関して上記の概念が適用

できると考えられ、緊急性の高い

がん患者さんの早期の回復には、

患者さんの体力、病勢などを考慮

して通常量よりも増量して対応す

ると良い結果を生じることが数多

く見受けられます。

しかしながら問題点として、食

欲が低下し、体力を消耗した患者

さんに増量した漢方薬などを服用

させることができるのか? とい

うことです。漢方薬の煎じ薬、通

常のエキス剤などを使うと量と味

の問題で患者さんが苦勞し、飲め

なくなりドロップアウトしてしま

うことが数多く見受けられまし

た。

また主治医の同意だけでなく、

増量することで生じる患者さん本

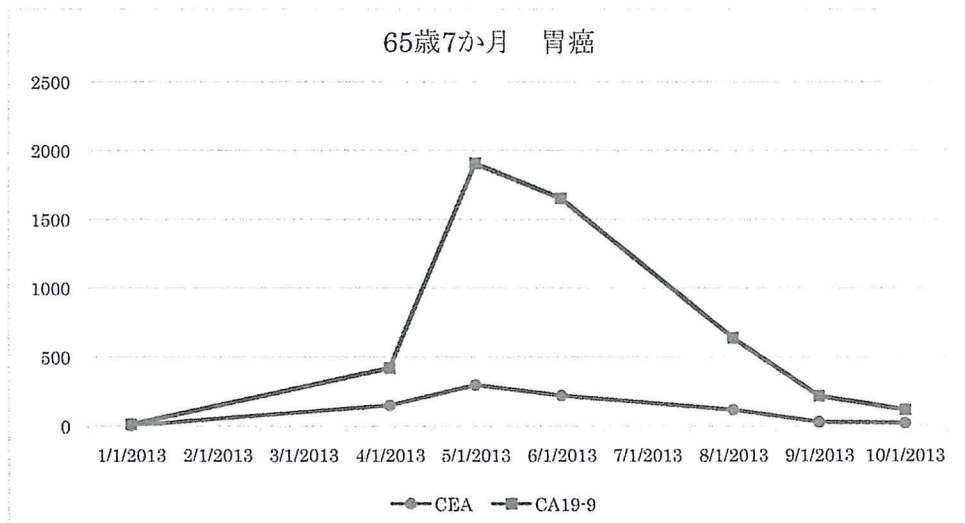
人の不安も大きく、現実的に困難

であるという見解に至りました。

その解決策として検討したの

が、機能性を持つ食品由来の抽出

たしました。そして、現代医療、代替補完療法をしているわれわれ医師と一緒にがん患者さんのQOLの向上のために努力を惜しまないという姿勢は、患者さんやわれわれにとつて非常にメリットがあると感じられたことが提携の理由です。



がん患者さんの症例 中尾典義

1、65歳 男性 末期胃がん
 がん性腹膜炎による腹水
 余命6カ月と宣告される
 去年(2013年)の2月に胃

がんになる。抗がん剤による治療をし順調に経過していたが、今年の3月よりがん性腹膜炎より腹水貯留。そのためリンパ免疫療法を2013年1月より開始し、それとともに6月末より上記処方を開始、当時CEA 220・9、CA19-9 1431と非常に高値。漢方服用1カ月後に腹水が取れ、食欲も出てきて、体調が回復傾向に向かう。
 同8月、CEA 115、CA19-9 520、同10月CEA 21・2、CA19-9、95まで低下。
 同10月、体調が上がったため主治医より、再度抗がん剤の処方を行われ、腹水が再発、そのまま維持できず衰弱により絶命したが、家族よりお礼の手紙を受け

取る。血液検査の結果は図に見るとおりである。

2、47歳 男性 末期膵臓がん
 がん性腹膜炎のため腹水
 余命1カ月を宣告される。

上記のように診断され国立がん研究センターを受診したが「治療不可」とのことで、元の病院に戻される。まだ働き盛りのため、可能性を求めて上記の漢方処方を服用開始。1カ月後に奥様より、「濁っていた腹水が透明になり、その後腹水がなくなり、食事ができるようになり体力が回復した」と報告があったが、その後抗がん剤治療を再開され、体力が落ち5カ月後に死去。

3、63歳 女性 大腸がん中期
 手術後、肝臓に転移が見つかる
 余命半年と言われたとのこと

患者さん本人が臆病な性格のため、困難ではない初期のがんということで説明し、安心して飲みやすい形状のものをと求められた。通院している病院では通常の手術や抗がん剤による治療を行うため、自分が転移がんだとわかるが、上記処方を併用しているため体力が落ちず、体調も上下はあるが6

年間も維持しており十分延命効果を得ていた。
 しかしながらCTにより脳腫瘍が発見され、それを手術することを決断し、その術後に体力が落ち、入院中に逝去された。

まとめ 高橋正樹

今回、このように立場の違う漢方薬局との連携ではありますが、医師と薬剤師が共同でがん患者さんに向かい、アドバイスおよび治療を行うことで、相互補完ができ、がん患者さんのQOLの向上に非常に役に立っております。

がん患者さんやご家族にとって何がベストなのかを考えると、医者だけの薬の処方や手術ではなく、患者さんと医療に携わる人々との密な結び付きがあつてこそ、より良い治療効果が期待できるものと思っております。